

2003

ひびき



受けるよりは与えるほうが幸いである

It is more blessed to give than to receive

『ひびき』

受けるよりは与えるほうが幸いである

目 次

はじめに	
『ひびき』によせて	2
1 女性・ホームレス	
立ち直って出発するところ『やすらぎの家』.....	4
2 養護施設の子どもたち	
コーラスを通して一つのテーブルに	8
3 未婚の母	
いのちの誕生は大きな恵み	12
4 乳がん手術	
手術からの5年、そして今、これから…	
胸の片隅に残る不安とともに	16
5 知的障害の仲間	
解決できない現実こそ…	
自閉症の子を持つ母親との出会い	20
6 家庭内暴力	
DV被害者と共に	
男性優先の社会の底から	26
7 家族に代わる介護介助	
難病の娘と私の自立—『コンビニハウス』の誕生—	31
8 児童虐待	
わが子を愛したいのに、愛せない母	36
あとがき	41

付録：2003年度四旬節キャンペーン資料の問い合わせ先一覧

『ひびき』によせて

社会福祉委員会担当司教
大分教区司教 宮原良治

エリコの近くで物乞いをしていた盲人バルテマイは、ナザレのイエズスのお通りだと聞くと、「ダビデの子よ、わたくしをあわれんで下さい」と叫び声をあげました。周囲の人々がしかりつけて黙らせようとしたのですが、ますます、「ダビデの子よ、わたくしをあわれんで下さい」と叫び続けました。イエズスは立ち止まり、バルテマイの叫びに耳を傾け、その願いを受け止めて、神のみ業と栄光を示して下さいました（マルコ10：46-52）。

いつの時代でも、叫びの声は絶えることがありません。いろいろな人がさまざまな形で叫び声をあげています。また、一方では、叫んでいる人を黙らせようとして、圧力をかけたり、貴重な叫び声を抹殺しようとする動きがあるのも事実です。社会福祉委員会・カリタスジャパンは、さまざまな声に耳を傾けながら、ささやかではありますが、小冊子『叫び』を発行して、叫び声のほんの一部を紹介してまいりました。その心は、貴重な叫びの声を、決して、暗闇に空しく消えてしまう犬の遠吠えにはしたくないとの願いからです。むしろ、一人ひとりの叫び声に耳を傾けて自らの身を低くし、膝をかがめ、その人々に近づかれるイエズスの姿になりたいとの願いからです。小冊子『叫び』もおかげさまで6回のシリーズを重ねることができました。小冊子『叫び』の発展のために、これまでさまざまな形でかかわって下さった方々に心から感謝とお礼を申し上げます。これからも皆様に支えられて、さまざまな叫びに耳を傾けながら、その声を大切にしていきたいと思っています。

ところで、これまで6回の小冊子『叫び』シリーズを通して、さまざまな形の叫びの声を紹介してまいりましたが、それらの叫びには、いかなる意見も勧めも注釈も付加されませんでした。ただ単純に叫びの声だけをお伝えし続けてきました。ところが、叫びはただ単独に叫びとしてだけ存在するものではありません。その叫びに耳を傾け、共鳴し、感化を受けて、叫んでいる人と歩みを共にしている人々がいるのも事実です。小冊子『叫び』の編集にたずさわっているスタッフは、叫びの声を大切にし、その叫びの声が周囲の人々の心に届き、さまざまな営みや動きがあることに注目し、叫びと同時にその叫びの先にあるものも紹介したいと熱望するようになりました。きっかけは、2001年度の社会福祉委員会・カリタスジャパン教区担当者全国会議の折り、これまで発行された小冊子『叫び』シリーズが、合本として再発行されることが決議されたからです。その決議に基づき、編集スタッフは、これまでの叫びの意義と役割を大切にしながら、その大切さと重要性を、さらに新たな視点で進展させたいと願い、これまでの小冊子『叫び』シリーズの名称を、これからは『ひびき』と改名して、新たに再出発したいと願いました。それは、決して人々の叫びを黙殺し、その手段を断念することではありません。むしろ、叫びが単なる叫びだけに終わるのではなく、その叫びがもっと多くの人々の心にひびいて欲しいとの願いが込められています。叫びの声が共感や共鳴を持って多くの人々に受け止められるとき、その叫びは“ひびき”に変わっていくと信じているからです。

小冊子『ひびき』の編集スタッフは、これまでの『叫び』と同じ編集スタッフでお手伝いさせて頂いています。毎年恒例ではありますが、編集に際しての悪戦苦闘と試行錯誤は絶えません。これからも、引き続き皆様からのご理解とご支援とご協力をいただけますならば幸いです。

立ち直って出発するところ『やすらぎの家』

増えてきた女性ホームレス

山谷地区は「ドヤ」といわれる簡易宿泊所が集結しているところです。歴史をさかのぼれば江戸時代に端を発しますが、近年では、東京オリンピック前後から始まった経済の高度成長を根底で支えてきました。地下鉄、高速道路、高層ビルの建設、あるいは、機械化される前の流通部門などで、山谷に集まった単身労働者が果たした役割は決して小さくありません。

しかしながら、高度成長にかげりが生じ、バブルがはじけてからというもの、山谷は働こうにもなかなか仕事が見つからない、寂しいところになってしまいました。必要なときは使い、いらなくなったら、ポイと捨てるという国のやり方がそのまま映し出されています。

ここ数年の山谷は、高齢化が進んで、仕事なし収入なし現象が恒常化しています。当然ながら、路上生活者も増えるばかりです。山谷地区の商店街のアーケード下や玉姫公園だけではなく、隅田川周辺や高速道路下、それに山谷周辺の公園に段ボールやブルーシートを頼りに生活している方が多く見られます。

路上生活者は男性ばかりという常識はとっくに打ち破られています。つまり女性のホームレスが近年増えているのです。年齢はまちまちで、高齢の方もいれば若い方もいます。

どうしても、男性中心

山谷がもともと、日払い単身労働者の町であったために、収入がなくなったり、病気になったときの保護処置が男性優先になりがちでした。法律には男女の差別はないはずですが、男性向けの施設に比べ、女性向けはごく少数というのが現実です。

山谷には、いくつもの自助グループがあり、炊き出しや夜間パトロールといった共通項を持ちながらも、それぞれの特徴を出して活動しています。『ほしのいえ』は作業所を開き、小さなりサイクルショップを持っていますし、『山友会』はボランティアの医師によるクリニックを開設しています。それぞれ得意分野を持ちながら、もっとも助けを必要としている方々のために働く努力をしています。その結果が男性中心になってしまうのは仕方のないことでした。何しろ、目の前にいるのは多く男性であり、女性は隠れた存在でした。

女性のために何かできないか

十年前から、山谷で援助活動を行いながら、必要に迫られて外国人の女性のシェルターハウスを開いた人がいます。中島儀一さんがその人です。中島さんは、早くから男性の影に見え隠れする女性の存在に気付いていました。それが昨年開設された『やすらぎの家』に結びついていくのです。必要性はわかかっていても、実際、実現するとなるといろいろなハードルを乗り越えなければなりません。資金、具体的な場所、行政的な手続き、開設のための準備、等々。いずれも大変なことですが、自然と整っていくものです。

問題は、誰が日々、お世話していくかです。かつて、幾つかのシェルターハウスが閉館を余儀なくされたのは、世話をする人がいなくなったからでした。中島さんにしても、男性の世話には多少慣れていましたが、女性は未知の世界でした。

この難問を引き受けたのがシスターモンセラート・ガルシアさん（以下シスターと呼ぶ）でした。スペインから来て、すでに山谷で10年以上働いた経験のある人で、まさに天から与えられたような方です。中島さんは彼女にすべてを任せました。

はじめは数人から出発しました。でも、すぐに定員の18名に達しました。いつも満員ということは、結果的に、どれだけ必要とされていたかの証明ともなります。

そばにいること、そこからすべてが始まる

シスターは、自分の仕事を「そばにいること」だといいます。「彼女たちのために何かしてあげようなんて考えることはとんでもないことです。そばにいて、自然とすることがわかってきます」

毎日どんなことをしているのですかという質問をされて、彼女はそう答えていました。年齢は20代から30代まで、それまでの生活事情のまったく違う人たちです。共通しているのは、行き詰まってどうすることもできなくなって入ってきたということだけです。それも、警察や行政からの紹介で送られてきた人たちです。それぞれの事情を抱えながら、『やすらぎの家』にたどり着いたのです。入ってくるときは、何も持たない人が多いので、早速身のまわりを整えることが必要です。あるもので間に合う人ばかりではないので、気持ちにあったものを買に行ったりするのもシスターの仕事です。一緒に行って気に入った物を買うことが多いとのこと。まだ使えるとって古着を届けてくださるのですが、残念ながら使えないことも多いとのこと。決して贅沢するわけではありませんが、良いからといって押しつけるわけにはいかないのです。

病院に行くのも大切な仕事です。ホッとしたりとたんに押しえられた病気が出てくるのは仕方のないことです。身体の病気とともに女性たちを蝕んでいるのは心の病気です。特に若い人の多くに、この傾向があります。それも重いものではなく、やる気がおきない程度のもがよくあるとのこと。若い人が何もやる気を起こさず、一日ベッドに座ってテレビを見ているのを見ると、悲しくなってしまう。何か仕事を見つけて働き、自立してもらいたいと心から願ってしまうそうです。シスターは、千葉県流山市の修道院に住み、そこから、東京都台東区に通います。まず、本部でミーティングがあり、その日の打ち合わせをして『やすらぎの家』に行きます。『家』につけば、早速、仕事があります。あっという間に一日が過ぎて、くたくたになった身体を引きずって修道院に帰るという毎日です。一日一日が新しいことへの

挑戦であり、発見だそうです。

立ち直って出発するところ、『家』

『やすらぎの家』は、住み着くところではありません。元気を取り戻し、気持ちに余裕が出てきたら、もう旅立つ時期がきたのです。行政の援助を受けて「自立」し、社会復帰していく人もいます。しかし、もとのホームレスの生活に帰る人もいます。『家』が天国になって居着いている人たちもいます。

いろいろな人がいますが、基本的に『家』は一時の仮の住まいなのです。旅立っていても、人間関係は切れません。シスターは、できる限り訪ねて行くようにしているそうです。『やすらぎの家』が役に立ったことを見届けるためだけではなく、一時的ではあったにせよ、共に生きた仲間に来て元気になっていただくためだそうです。まるで卒業生のように良いアドバイスをしてくれる人もいます。か細い人間関係を大切にする姿勢が『やすらぎの家』の基本姿勢でもあります。

「何かできることはありませんか」という善意の人たちの申し出に、シスターは、もしよろしければ『家』に来て下さい。幾分の時間でも一緒に過ごしてください、とっています。一緒にいれば何をすればよいか分かる、そして何が一番大切で、何が一番足りないかがわかるといます。これは、私たちの日常生活の中でもそのまま当てはまることです。

2 養護施設の子どもたち

コーラスを通して、ひとつのテーブルに

静かな住宅街にあるN氏のお宅を訪ねたのは、天候不順の6月半ばであった。通された応接間は防音装置が施され、部屋の半分以上を占める2台のピアノ、壁にかけられたバッハやショパンなどの作曲家の額、専門書がぎっしりと並んだ本棚。まさしく音楽家の職場である。

思いがけない子どもたちとの出会い

「長男がシスターの経営する幼稚園に通っていた頃ですが、私は地域の子どもたちにコーラスを教えたい思いがあったのです。それをたまたまシスターに話したら『それでは是非うちの子どもたちに…』といわれ、思いがけなく養護施設の子どもたちにコーラスを指導することになったのです」

きっかけはちょっとした立ち話から、と淡々と話すN氏だが、それからなんと本職の児童合唱団の指導と平行して、毎週1回、35年間という長期にわたって養護施設の子どもたちの合唱指導を続けているのだ。

「もちろん、このような子どもたちとの出会いははじめてでした。でも、出会った途端に、私はすっかり彼らに惹き付けられてしまったのです」

お母さんから貰う「歌える心」

合唱団の子どもと彼らとの違いは表面的には感じられなかったが、歌ってみるとすぐに大きな違いに気付いたという。合唱団の子どもは、「口を縦に開けるんだよ。正しく呼吸するんだよ」というとすぐに行うのだが、この子らのほとんどが口を開けないのだ。

「小さい時からさまざまな境遇を背負ってきた彼らには、心の中に、口には出たくない深く押し殺した思いが詰まっっていて、そのために閉ざされてしまった心が、口を開けることを難しくさせているのだろう」

そう考えた時から「彼らが心を開いてくれるためには、どう向き合っていけばいいだろうか」ということがN氏のテーマとなったそうだ。

N氏は、長い間のコーラス指導の経験を通して、子どもの歌える心は、お母さんが生活の中で自然に植え付けるものだと考えている。

「この子どもはとってもいい子です。でも心を開らく、歌うということの背景は、あくまでもお母さんの愛情だと思います。そのお母さんの代わりを、ここでは先生方が寝食を共にしてなさっていますが、『生みっ放しではなく、母親の手元に1時間でも2時間でもいた、お母さんの腕に抱かれていた時間がその子の人生に深く影響していると思います』と以前、シスターから伺った言葉が忘れられません」

N氏は発声の基本を身振り、手振りをまじえ、また聖書の言葉を引用しながら、「人の体はすばらしい楽器です。口を縦に開ければ自然に正しい呼吸ができ、美しい声が出ます。息を吸うことは己を見つめる瞬間で、吐くことは自己表現になります」と語り、コーラスの練習の短い時間の積み重ねの中で、忍耐強く繰り返して口を正しく開けることを教えているという。それは人生を通じて、息を吸うことの意味と吐くことの意味の大切さを子どもたちにわかって欲しいという彼の願いなのだ。

子どもたちに目をむける

口を開けない子どもでも、N氏はかすかに開いた口を決して見逃さない。間髪をいれず「オッ、開いた！ そうだ！」と声をかける。昨日まで全然口を開けなかった子が今日、口を開けた、それが彼にとって非常な喜びなのだ。彼は、子どもたちの口が開かない時は、まだ自分

の心が子どもたちに届いていないのだ、と自分の非を感じるそうだ。

『子どもたちに目を向ける』ことは、コーラスの間で一番大切にしていることだ。短い時間の中で多くの子どもに目を向けることはなかなか難しい。しかし、ひとりに目を向けたら必ず全体の子どもに均等に目を向けることを忘れない。下を向いている子にも、頭を上げてこちらに目を向けたらすぐに自分の目を返してやる。歌わない子にも「ああ、あの子は今こうしているな」と感じていて、口を開けた時にはすぐに「そうだ！」と声をかける。しかし、たとえ声に出して歌わない子でも、目の中に楽しかったという気持が見えれば、その子はコーラスに参加していると思っているのだ。

「コーラスのすばらしさはみんなでいっせいにひとつの心になれることです。コーラスを通してひとつのテーブルに着くことができますのです」

みんな認めて欲しいのだ

年に一度、いろいろな施設が集まる文化祭でコーラスを発表する機会がある。口を開けない子や歌わない子も、その時は張り切って制服を着て出る。「そういう時でも私は決して『君は歌わないから駄目』とはいいません。どんな子どもでもみんな舞台に立ちたいし、認めて欲しい、とわかっていますから」N氏は子どもの心を簡単に表面だけで判断する危険性をよく知っているのだ。

「私は決して大きな声を出したり、怒ったりしません。そうすることが、『君を認めているよ』ということに通じるのです。全ての子にとってコーラスの練習が楽しい時間ではありません。1時間半の練習が嫌でたまらない子もいます。でもどんな形でもコーラスの間、その場にいれたなら、それでよいのです」時にはその場にいることが苦痛な子に、少しでも楽しく過ごせる工夫を試みる。

「T君、この曲に合わせて振り付けを試みるかい？」とじっとできない子どもに声をかける。一生懸命振り付けを考え、みんなを指導

しているT君の顔は、認められた喜びで生き生きと輝いていく。

N氏には幾つか忘れられない嬉しいエピソードがある。ある時、全く歌わないで卒業した子どもに何年ぶりかで会った時のこと。その子が町に偶然流れる「四季の歌」を聴いて「先生、あの歌、昔歌ったね」といったのだ。「ああ、彼にとって苦痛でしかなかったあのコーラスの時間が、彼の中では生きていたのだ。あの時間が無駄ではなかったのだ」悩みながら、時にはお手上げの状態が続けてきたコーラスの指導が子どもの心の中に生きていた、本当に嬉しい彼の言葉だった。

N氏にとって子どもたちは

「振り返ってみると、よくここまでコーラスを続けてきたと思います。35年の間、私はただ、ただ子どもたちが私を信頼してくれて、私に目を向けてくれるのを忍耐強く待つてやってきたという思いです。でも子どもたちはすばらしかった。何のかんのといっても私を受け入れてくれているのです。子どもたちの私への愛情を感じます。それがなかったならば、続けてこなかったでしょう。私はどういう状態になろうとも、ここに私を待っていてくれる子どもが一人でもいると思うと行かざるをえません」

彼はまた、長い人生の間には当然幾つかの苦しみ時はあったという。しかしその時々で、知らず知らずのうちに子どもたちの大きな支えを感じている。

「今、私は68歳になりましたが、この子どもたちからエネルギーを貰っています。私にはまだ年をとったという感じはないのです。『今日も子どもたちから何かすばらしいものを貰うかな?』という期待を持って家を出、『今日も最後まで頑張ったね』と認めてあげて帰る」

昨年の復活祭に、N氏は洗礼を受けられた。もともと音楽家としてヨーロッパの教会を巡る機会は多く、神の存在を十分に感じていたN氏にとって、子どもたちの存在は大きな後押しになった。

いのちの誕生は大きな恵み

ある教会の青年会の様子を司祭に伺う機会があった。

その日26才のK子さんが、結婚が難しい相手と交際し、未婚のまま妊娠してしまったこと。子どもをひとりで育てるのは無理だろうか、子どもができたなら結婚すべきなのだろうか、と心の中の惑いを分かち合ったのだ。今まで教会では話し合ったことのない重い内容であったが、青年たちは自分たちの問題として真剣に考え、最後にはみんなで彼女を支えようと励ましあった、というのだ。

K子さんの話

私は3年前から、25才年上の男性と交際していました。彼は奥さんを3年前に亡くし、19才の娘さんがいました。私の両親は当然のことながら結婚には反対でしたが、過ちは犯さないと堅く約束して、ようやく交際を許して貰っていたのです。

でも私は、あんなに約束した両親を裏切ってしまい、私のお腹の中にひとつのいのちが宿ったのです。ふだんは私の交際をどんなに両親が心配し苦しんでいたか、よくわかっていたのですが、その時は、両親のことも何も頭にはありませんでした。

私は妊娠を知った時、産みたいと思いましたが、両親に子どもの誕生を祝福して貰える自信がなかったのです。結婚も迷っていました。毎日毎日悩み苦しんで、とうとう教会の青年会で話したのです。

教会の青年会についての司祭の話

K子さんが悩みを打ち明けた時、その場に居あわせたある女性信徒はこういったのです。「K子さんの発言は本当にショックです。彼女のお腹に赤ちゃんが居ることも驚きましたし、そんな話が教会で出る

とも思ってもいませんでしたので…」と。

今までもこの集まりはいつも誰かが友人を連れてきて、半分は教会外の若者なので、あまり教会ということ意識せず、いいにくいことも結構話していましたが、やはり仕事のことがほとんどだったので。

でも彼女はこう続けたのです。「しばらくK子さんの話しを聞くうちに、私はこんなに辛いことをいえた彼女の勇気に感動しました」と。

その後の青年会では、今まで教会で話題に上らなかった男女関係のこと、結婚や中絶のこと、また子どもは両親そろって育てなければいけないのだろうかなど、いろいろなことを真剣に話し合っていましたね。そして「私たちもK子さんの発言でずい分心を開いて話せるようになった」とか「私たちが今、人間としてどういう立場に居るのか再確認させて貰った」とか、いろいろな気づきが話されました。結局、みんなでK子さんの過ちを裁くのではなく、K子さんと赤ちゃんを守っていこう、という結論になりました。中には早速、親が結婚していない子どもの戸籍について市役所まで行って調べてきた青年もいます。

お父さんの話

私たちには子どもが7人いますので、今までずい分いろいろなことがありましたが、今回のことほど家族中が苦しんだことはありません。

3年間心配したあげく、裏切られてしまったのです。

はじめてK子から妊娠したことを聞いた時は、正直「相手の男性を殺してやりたい」と思いましたよ。お金がなくてもドーンと構えているような妻があんなに取り乱したのを見たのはじめてです。

でもどういう状況で生まれようと、ひとりのいのちが生まれるということは大きな恵みです。子どもの顔を見たら、ますますそう思います。

しかしそうかといって結婚と子どもの誕生は別です。私から見ると、彼には誠実さが感じられませんので、結婚には今でも反対です。

世間ではこれからもいろいろとわが家の噂をするでしょう。でもそのとぼちちりや苦しみは、家族全員で受けてやろうと思っています。

日本人はすぐに“世間体”といますが、“世間体”で人間のいのちを絶ってしまうなんてとんでもないことです。もちろん墮してしまえば外見的には何も残りませんが、心の中には大きな問題が残りますよ。

先日ある女性から手紙が届きました。彼女は妻子ある男性との間に子どもができ、仕方なく墮して2年になるのです。しかし今でも、赤ちゃんに会いたい、自分が許せない、相手の男性も許せない、赤ちゃんを胸に抱きたいと嘆き苦しんでいるのです。彼女も赤ちゃんを産んだ喜びを体験したかったのです。それができないから、苦しんでいるのです。もちろん墮胎した人を責めるつもりはありませんが…。彼女も苦しみ、悩んでそうせざるをえなかったのですから。その意味で、K子の選択は良かったのだと思っています。

お母さんの話

私の心の中には、まだ二人を許せないという気持があります。特に彼にはあんなにお願いしていたのに裏切られたとってしまうのです…。でも私がこんな思いでいてはいけません。許せないという気持が赤ちゃんに伝わると、この子は不幸になってしまいます。一日も早くふたりを許せる人間になれるように、いつも神さまに助けを祈っています。

私は、家族が子どものことをいつも心にかけて育てていれば、たとえ片親でも立派に育つと思っていますから、「私が手伝うからひとり育てなさい」といっています。ただこの子が大きくなった時、父親を求め、相談したいと思う時がくるでしょう。その時は、神さまに委ねたいと思います。きっと神さまが全てを良くして下さるでしょう。

今のK子さんの気持

はじめて赤ちゃんを抱いた時は涙が止まりませんでした。それは今まで自分のことしか考えないで「なんて自分勝手な生活をしていたのだろう」と気付いたからです。今は結婚を考えていません。結婚相手としてこの人しかいないと思えば結婚しますが、子どもができたから仕方なく結婚するという考えにはなれないからです。

妊娠中は悩みで耳が聞こえなくなった時期もありましたが、家族に支えられ、教会に受け入れられてすっかり治りました。

今、私も、この子も幸せです。こんなにみんなに祝福されているのですから。私もこれから世間体を気にしないで生きていきます。私が世間体を気にしていると、この子も小さくなって生きなければいけませんので…。

司祭が語るその後の青年たちの気持

K子さんの話を聞いてから、青年会は今まで以上に教会の外に向かっても元気な者が倒れている者を助け、また立ち上がった者が他の倒れている者を助けられるようになった気がします。青年たちはもちろんこれからもK子さんを応援しますよ。みんな父親になったつもりでいるのです。

そして今は教会全体が彼女を大切にしている雰囲気がありますね。教会は今、みんなの心のふれあいの場になってきている気がします。K子さんの赤ちゃん誕生と、ひとりで子育てをという決心は、教会にすごい希望を与えてくれました。確かに若者は、軽い気持で行動することがありますが、彼女は悩んで苦しんで、自分の生き方を決めたのです。過ちは過ちと認めながら、過ちに留まらないで、これからどう生きるかを大切に作る人間になるようにと励ましています。K子さんの生き方を通して、生まれるいのちだけでなく、青年たち自身もどんな時でもいのちを大切に生きていこうという力が湧いているようです。

4 乳がん手術

手術からの5年、そして今、これから 胸の片隅に残る不安とともに

なぜ私のがんに？—砕かれた自信と手ひどい結果—

乳房のしこりに気付いたのは4年半前。もしやと疑い、はっきり宣告されるのが怖くてぐずぐずしていて病院に行くのが遅れ、医者にかかった時には、発見の時点から2ヶ月が経過したため腫瘍は大きくなっており、即手術といわれました。

食事の内容や、日々の生活態度など、健康には日ごろから十分すぎるほど気を使っていました。そんな私のがんにかかるはずはないと、半信半疑で手術の日を迎えました。手術には3時間かかりました。1時間なら良性、3時間ならがんと、前日に聞いていましたので、ああ、やっぱりと、病棟のベッドの上でうつろな気持になりました。

乳がんの手術には、乳房の形の変化が少なくすむ乳房温存術と、乳房の形を残さない乳房切除術とがあります。私の受けたのは後者の手術でした。傷跡は、退院する前の日、病棟のお風呂に入ったときはじめて見ました。左の胸が平らになって、あばら骨が薄く浮き出ているのを目にしたときのショックがわかりますか？同じ日に手術した10歳年上で、再発した方がいらして、その方とは、いろいろな検査で一緒でしたから親しくしていました。その方のところに飛んで行って、涙をぼろぼろ流しました。あなたは強い、自分は家に帰ってから恐る恐る見て、やっぱり泣いたと、慰めてくれました。

涙を止めて、もとの私に戻ろう

病院には3週間入院していました。このとき受けたCT検査で、「肋骨に影がある」といわれました。骨に転移の疑いが出たのです。MRI検査を2週間後に受けた結果、疑わしい点もあるので、半年間、様子

をみることになりました。さらに退院前には、追い討ちをかけるように、リンパ節への転移も告げられました。

ショックの連続で、帰宅してからは家族の前で、涙がぼろぼろこぼれて止まりませんでした。完全にうつ状態に陥っていたと思います。

私には、自分はしっかりものの妻であり、母であるという自負がありました。今まで、家族の前で、それも自分自身のことで泣くなどということは、一度もありませんでした。

家族は、そんな私をどう扱っていいかわからないようで、困り果て、腫れ物に触るようにしているのが、手に取るようにわかりました。

このままではいけない、もとのようなしっかり者の私に戻らなければ、家族が崩壊してしまうと危機感を覚え、うつ状態からの脱出方法を必死に考えるようになったのです。

悶々とした日々を過ごしていた頃、眠られぬ夜にたまたま聞いたラジオ放送で、漢方の先生の講演があって、その内容に感銘を受け、漢方薬の服用を考えてみることにしました。心が沈む原因の一つに、毎日飲んでいる抗がん剤の副作用による吐き気に、毎朝悩まされていたことがあったのです。

講師の先生と師弟関係にあった女医さんが在籍していた大学病院へ早速出向きました。その先生の指導で、抗がん剤を飲まなければならなかった2年間、漢方薬も飲み続け、副作用も軽減でき、気分も明るくなっていきました。

半年後、骨への転移の疑いは晴れました。影が消えていたのです。その時、やっと心が安らぎで満たされました。

聞いて！聞いて！私の話—経験したから共感できる—

乳がんの患者の集まりがあることは、新聞で知っていました。会の活動方針である「会員同士の情報交換を行い、乳がんの怖さ、早期発見の大切さを社会にアピールしていく」に共感を覚えました。

さらに、「乳がん患者の話し相手」というボランティア活動のある

ことを会のパンフレットの中に見つけました。

病氣のことを忘れられたら、どんなにいいかと思います。でも朝晩薬を飲み、月1回は診察に通う身では、望むべくもありません。それならば、病氣のことをマイナスに考えずに、プラスの方向で捕えてみようと思って、このボランティア活動に参加することにしたのです。

自分の経験からいって、患者は自分の病氣のことを人に話したいのです。人に話すことで、いろいろな想いを体から吐き出して楽になりたい。そこで元気な人をつかまえて話を聞いてもらおうと、相手は真摯に聞いてはくれますが、この気持はわかってもらえなかったのではないかと、同情してくれただけではないかと、疑心暗鬼になることが多く、かえってむなしさが残ります。

家族に話すということもありますが、話せば心配しますし、心配させたくない気持のほうが強く出て、十分には話せません。

そこで同じ病を体験した人が話を聞いてくれれば、これに勝るものはないといえるでしょう。同じ病氣をした人の仲間意識は、他からうかがい知れないほど強いもので、だいたい1回会っただけで親しくなれるほどです。この気持は、病氣をしていない人には、ちょっとわかりづらいかもしれませんね。

患者さんの悩みで一番多いのは、抗がん剤の副作用のことです。これは医者領域なので、自分の経験は話しますが、副作用は一人ひとり違うことを伝えます。抗がん剤のメリット、デメリットについては、医者によく聞き、納得してから始めるようにしています。

自信を取り戻せて—夫や家族との関係を再構築—

他のがんと違って、乳がんは女性にはつらい病氣です。私も、片方の乳房がないということは、女性として負い目ができたような気持でした。これが、手術後うつ状態にまで気持が落ち込んだ、大きな要因でもありました。この気持は、夫との関係を新しく作り直していく過程で、克服してきました。

夫は、私がお産以外に入院したことがなかったものですから、妻は病気をしないものだと思っていたようです。自分の仕事が猛烈に忙しかったこともあり、家のこと、子どものことは私任せで、私のことをちゃんと見ていなかったのです。一緒に旅行をしても、話をして、心ここにあらずで、仕事が頭から離れないようでした。

そんな時、「死」というものをふたりが、また家族が見つめざるを得なくなって、別れのその日まで、ふたりの暮らし、家族の暮らしを、心豊かなものにしたいという、つまり全員が家族の原点に立ち返り、お互いがかけがえのない存在であることを再確認できたことが、私に自信を取り戻させたんだと思います。

何か大きなものに見守られて

再発については、あまり考えないようにしていますが、それでも不安感でまだ気持の落ち込むときがあります。そんな時、病気になる前から取り組んでいた対面朗読や日本語教師のボランティアに没頭することで救われています。家族以外のところでも役立っていると思えば、考えは自然と前向きになりますから。

元気な時から取り組んでいたボランティアの活動が、こんなとき役に立ってくれるなんて、思えば不思議なことですよ。気持が沈んでいた時、今日一日こうやって動けることに感謝できればいいと思っていました。今では何か大きなものに守られてここまでできたと、思っています。それはキリスト教の神でも、仏教の仏でもいいんですが。

解決できない現実こそ… 自閉症の子を持つ母親との出会い

私たちが訪れたコミュニティは風にゆれる青田が周辺に広がる里山の原風景の中にあった。斜面の茶畑は真夏の日差しにその畝を美しく際立たせている。現在20名の知的ハンディの男女（以下“仲間”と呼ぶ）、アシスタント、職員の約30名が3ヶ所に点在する手づくりの家で共同生活をしている。各作業所では粉石けんや木彫りのアイコン、牛乳パックをすいて作ったハガキやカードが“仲間”との共同作業で製品化され、彼らの自家栽培の米や野菜は毎日の食卓を賑わしているそうだ。

主宰者のSさんは「このコミュニティはひとつの実践の場で、また成長の場でもあると考えているので、訪れてくれる人と“仲間”との食事を共にする時間を大事にしたいと願っています」と説明されて、早速私たちを昼食に招いて下さった。風通しのよい2階の食堂ではそれぞれ仕事を終えた“仲間”たちが集まり賑やかに手伝っていた。収穫したばかりの西瓜が赤い切り口を見せてドカンとテーブルの真中に盛られている。私たちを見かけて「どこから来たの」、「あなたの席はここ」などとあちこちから声を掛けられた。とても明るい。「畑の仕事は面白いよ。このしし唐はあたしがとってきた」と隣に座った若い女性は箸でつまみあげて得意気にいった。さっさと食べ終わる人、のんびりと口に運ぶ人とさまざまだが、最後の人が食べ終わるまで誰も席を立つ人はいない。“仲間”との連帯を大切にしている様子がうかがえる。

来訪者

「先日あるお母さんから電話がありました。息子さんに自閉症の障

害があり一度訪ねたいといわれるので、『小人数で家庭を作ることを目指している、大勢迎えれば施設の状態になってしまうので受け入れることはできない』とはっきりお伝えした上で、お待ちしたのです」とSさんは話を切り出された。「連れてこられた息子さん（19才）はやさしいすばらしい青年です。夕食の時に外出してしまった息子さんを携帯電話で居所を知ろうとする落ち着かないお母さんの様子を見て、もう少し構わずに自由にしたほうがよいのにと批判的にとらえていましたが、後で話を伺ってそれは軽薄だったと申し訳なく思いました」

子を思うあまり

母親は、この息子が他の子どもと同じように育てて欲しいとの思いで、幼い頃から懸命にスパルタ教育をして、何とか小、中学校へ必死で通わせた。その間、彼はいわゆる問題行動を繰り返す。家の皿やいろいろな物を壊したり、店から物を取ったり、兄弟の貯金通帳を解約し使ってしまう。電車の中で誰かがぶつかったりすると許さず、相手が子どもや老人など弱いと見ると、電車から降りた後もつけていって暴力を振う。ここに来たのは少なくとも、家にいるおばあさんが暴力を受けないのでホッとできる、ありがたいという。子どもを殺し一緒に死にたいとまでいう母親の緊張した表情の中に、Sさんはその日常化したすさまじさを改めて見る思いがした。「障害はしつけで治せるものではないですよ。問題行動は彼の言葉ではいえない内面の苦しみがそうさせているのですよね」

その苦しみを彼は誰に叫んでいるのか。

「お母さんにですよ。お母さんは彼にとって神さまなんです。神さまに叫んでいる。だから相談所や施設、少年院、医者、精神病院のどこにも今の彼を迎えられるところはありません」とSさんはいう。「でも私にはこのお母さんを批判する資格はありません。私だってそういうことをどこかで求めているからです」

私も同じだったから

20数年前のことだ。Sさんは自分の挫折からある知的ハンディの人の施設に手伝いに行った。

「“仲間”たちとの出会いから、そこで感じたのは施設という環境では彼らが決して人間的に迎えられていなかったということです」

理想主義の強いSさんは、“仲間”を助けようと彼らを連れて、普通の家で共同生活を始めた。

「もちろん問題はさまざまありましたが“仲間”たちと懸命に働きました。彼らはどんどん変わっていったんです。うつろな目をしてた人が笑い、話をしなかった人が話をするようになって、まるで死んだ人が生き返ったような変化をしたんです」

食事を大切に下さい

“仲間”たちの予想以上の成長や変化を見て8年位たった頃、Sさんは彼らの顔から笑顔が消えていることに気付く。

「その頃私は苛立っていました。『どうしてみんなニコニコしないんだ』って。変な話でしょ。笑わないといって怒っているんですから」

仕事ができ自立すれば、“仲間”たちは元気になると考えていたSさんの図式は、完全に行き詰まってしまったのだ。

ちょうどその頃、フランスでラルシュの家を主宰するジャン・バニエとの出会いがあった。Sさんやアシスタントたちの真剣な問いかけに、「仕事が一番大事ではない。大切なのは食事をする事です。一緒に食事を共にしながら共感する、“仲間”たちとのグループ生活をする中で、そういう体験を重ねていかないと食事を共にする大切さはわからない」と教えられたのです。

助けよう、解決しようとばかりしていた

「それを見つけるまで6年位かかりました。話し合い、分かち合い、内面を見つめていくうちにだんだんわかってきたのです。なぜ私は

“仲間”とここにいるのか、それは社会の人がなぜ彼らを受け入れないのかとの怒りからです。そしてそれを解決しようとしていたんですよね]

Sさんには朝起きると1日の仕事の計画を立て、夕方には段取りよく終えたと満足し、元気に働いてきたとの自負があった。“仲間”たちはゼロから本当に成長したけれど、“仲間”の立場になって考えてみると、彼らがいくら努力をしてもSさんの足元にも及ばないのだ。救おう、解決しようとの思いばかりで“仲間”の戸惑いやつらさに気が付かなかった。

「どれだけ“仲間”の心を壊して、彼らの笑顔を奪ってしまったのかと思った時、本当に落ち込んで…つらかった」

雄弁なSさんの言葉がしばらく途切れた。

深い次元で見たものは

自分も“仲間”の人の立場になってみようと思ったSさんは、朝起きても仕事のことを考えないようにして過ごしていくうち、うつ状態になり、本当に這う気力も失う位落ち込んでいったという。「この時“仲間”の人はいつもこういう状態にいるんだなとわかったんです。私たちの世界は“効率の世界”、できる、できないの世界、“仲間”たちの世界は“できない世界”、できる可能性のない世界なんです。“できない、可能性のない世界”がどういうものか本当に知らなかった」

立ちあがれない程の無力の世界に落ち込んだ時、Sさんは弱い人の内に湧き出ているすばらしいものが見えるようになった自分の変化に気付いたという。

「それは“仲間”たちのやさしさです。多分苦しんだ人でないと見えないものだと思います。“仲間”たちは『あなた元気?』『大丈夫?』『悲しくない?』ということばかり気にします。落ち込んでいる人の肩にそっと手をかけるということをするんです。彼らには助けるということなどできません。彼らは“できない”から共感するのです。や

さしい彼らが一番神に近い、そして弱さの中にこそ神の力が働くという福音の言葉をこの時実感したのです」

なぜみんな場所をさがすのか

苦しくて、ウロウロとじっとしてられない人を座らせてあげたいと思い、どこかに座らせる場所を見つけると、私たちはホッとする。

「これが解決しよう、救おうとする“できる世界”の発想です」Sさんは怒りを含んだ語調で続けた。「そしてみんな座らせる場所をさがしている、場所さえあれば解決すると思っている。そんな場所はないのです。その結果あちらへ行ったらとタライ回しが始まるんですよ」

成長のある段階では母と子は離れていかなければならない時もある、共依存でいては成長していかない。

「そういう意味では場所は必要でしょう、それは“できる世界”の問題として社会が作るものでしょう」

“仲間”との生活の中で彼らの幸せに関して何もできないことを思い知らされることが多く、ましてや親の愛情を求める彼らのすさまじさの前には、どんなひどい父親の代りにすらなれないとSさんはいう。

私たちは解決しないといけないと思っている…

この母親も息子を社会に合わせよう、問題を解決しようとして必死に場所をさがして訪ね歩きつづけ、息子をそして自分自身をも苦しめてきたのだ。「お母さんのせいではないんですよ」その苦しみに共感するSさんの言葉に、母親の緊張していた表情が少し和らいだ。

「解決も答えも出せない現実にしっかりと耳を傾け聞くことが大切です。これが教会コミュニティなのだと思います」このような叫びを聞かなければ教会は神から離れたものといっても過言ではないとSさんの思いは厳しい。

「知的ハンディを持つ子どもと、その母親と友人が集まる『信仰と光』という“動き”にお母さんを誘いました」何もできないSさんに「ありがとう」といって帰っていった母親からその後、メールが届いた。

件名：感謝します 送信日時：2002年7月22日

前略— お電話をいただき、思いきって出かけたA教会、行って本当によかったです。はじめての私をみなさんととても温かく迎えてくださいました。このような経験は生まれてはじめてです。今日は限られた時間なのにせきを切ったようにわが家のことばかりしゃべりっぱなしになってしまったこと反省しています。—中略— 今日のできごとがターニングポイントになるかもしれません。—中略— こんな暖かい心を持ったカトリックの人たちもいるんだと強く感じました。—中略— A教会に行って心がすっきりしました。忘れていました祈ること、自分のため人のため、目が覚める思いです。息子とふたりでA教会を近い内に訪ねたいと思います。

〇〇 〇〇子

【注】ラルシュの家

ラルシュは、1964年にジャン・バニエによって創立される。知的ハンディをもつ人の弱さやさしさに人間の根源の意味を見出し、生きることを学ぼうとする信仰のコミュニティ。現在29ヶ国、125以上のコミュニティに拡がっている。日本では静岡「ラルシュかなの家」がひとつ育っている。

DV被害者と共に 男性優先の社会の底から

道路から小さな案内板に導かれて細い階段を上っていくと、「こんにちは」という明るい声に迎えられた。奥の厨房からはおいしそうなにおいが流れてくる。えんじ色の敷物に白木のテーブルが柔らかに調和している室内は、観葉植物やリースに飾られ、『女性就労支援センター』という名称にふさわしいやさしい雰囲気である。壁のポスターに“食べることがボランティア”と書かれているのがほほえましい。ここは家庭内暴力を逃れて自立を図る女性たちが、支援者と共に立ち上げた喫茶レストランである。ある午後このお店の共同オーナーであり暴力被害女性への支援活動が続けておられるMさんにお話をうかがった。

生の現実に出会って

「私は修道女として若い頃より20年間教育に携わってきましたが、どうしてもエリート志向になる教育に疑問を感じていました。そんな時、山谷に研修にきて聖書の現実と出会ったのです。日雇いで得たお金でお酒を飲み、野宿をしては健康を害していく人々。蟻地獄のようなアルコール依存症の現実に聖書の場面が重なりました」

Mさんはなんとかしなければと、突き動かされるように日雇いの人たちの健康と生活を守るための活動に入っていったという。給食、食堂、作業所を立ち上げていく。試行錯誤を繰り返すうちに自分たちの援助が相手をコントロールしようとして、かえって依存を深めさせているのではないかという疑問を持つようになっていった。

アルコール依存症と家庭崩壊

Mさんは「目の前の現実に対する自分への呼びかけを大切にしたい」と願い、修道会を退会し、ソーシャルワーカーとして働きながら、アルコール依存症に苦しむ人々の回復を援助していく。ある勉強会でDV（家庭内虐待）被害者であるNさんと出会い、DVとアルコール依存症との相関関係とその底にある世代をつなぐ深い闇に気付いていく。

「アルコール依存症という病気が家庭内暴力を引き起こし、家庭崩壊に進むことが多いのです。またそのような父母の下で育つ子が、大人になって無意識に同じような相手を選んでしまうという事実もあります」

暴力によって相手を支配しようとする父親を批判しながらも、自分も同じ傾向を持ってしまう息子たち、そして虐待に耐え続ける母を見て育った娘は、父と同じ傾向をもつ相手を選んでしまうことが多いという。

愛しすぎる女性たち—共依存の関係

「Nさんを講師にお願いして依存症への関わり方を学ぼうちに、アルコール依存症の暴力被害を受けて苦しんでいる女性たちは、それを耐えることによって夫のアルコールへの依存を助長させている、いわゆる共依存の関係にはまりこんでいる人が多いのに気付きました」

「暴力を受けている女性たちは自分がいなければ彼はだめになってしまう。私さえ我慢すればこの家庭を守っていけるとひたすらに耐えています。平静になったときの男たちのやさしさも女性に耐える力を与えてしまうのです。そして暴力と悔恨が繰り返され女性は怯えと恐れで自分を失っていくのです」

暴力の恐怖の中で心身ともに傷つき、自由に判断し行動していく力を失っていった妻たちはうつ状態やPTSD（心的外傷後ストレス障害）に苦しみながらも、ひたすらに相手に合わせようと努力し、合わせら

れない自分を責め続けるという。

“妻は夫に従って家を守るのが務め”

日本の社会の伝統的考え方も、また妻たちの前に大きく立ちほだかる。

「男性の裁判官や調停員は長い間暴力にさらされ、感情的に不安定になっている妻の言い分よりも、社会人としての夫の巧みな自己主張に理解を示すことが多いのです。妻が自己主張すればわがまま、夫が自己主張すればしっかりしているということになるのです」

私たち日本人は“女は貞淑でなにごとにも耐えて”という伝統的価値観に今だ縛られているのだろうか。妻の人間としての当然の権利、自由に自分の意思で生きていくという「自己決定」の権利が、まだ日本の社会では十分には認められていない。子どもの親権などで妻が不利になることも多いという。

Mさんは自分をなくし、相手に合わせて生きる女性の生き方に疑問を感じ、カウンセラーとしてさまざまな虐待に悩む女性たちの回復のプロセスに付き添っていった。

電話相談ネット

配偶者からの虐待を受けた女性をどう守り、再出発をどう支援するか。昨年4月からDV法が施行されたが、女性たち、多くは子どもと共に逃れてきた母たちの社会復帰は容易ではない。確かに被害女性たちは法的に保護され各地に設立されたシェルターに入り、ひとまず安全を確保できるようになった。しかしそれは一時避難であって、問題は根本的には何ひとつ解決していない。自立への道筋がないのだ。夫を世帯主とする制度の中で専業主婦であった女性たちにとって、夫の家から離れた時、身分を保証するものはほとんどない…健康保険証も、年金証書も住民票もなく、住みなれた地域とそこでのつながりを失った女性たちは、夫の追跡に怯えながら安全に住む場所の確保、子ども

の転校先、就職とあらゆる問題に対処していかなくてはならない。虐待を受け心身共に痛手をおっている女性にとって、それはあまりにも過酷な現実である。

「今は暴力を振るう夫から母子が避難できてよかったね。めでたしめでたしという段階です。でも2週間の一時保護の後こそが大変なのです。安全に生活できるメドが立つまでにはクリアしなくてはならないことが山ほどあります。夫の追跡を逃れるために名前を変えた人もいるくらいです。役所関係の手続きや生活上のこまごまとした相談ができる場所がどうしても必要です」

Mさんたちは女性たちに付き添い、必要な手助けをするための電話相談ネットを立ち上げた。

自立への道筋

Mさんと仲間たちは「家庭の主婦がすぐに自信を持ってできるのはお料理。シェルターを出てからのDV被害者の社会復帰への第一歩として、フルタイムで働く前の練習の場として、自立支援のための食堂を持ちたいね」と夢を語り合った。

なぜレストランかという「レストランならば仲間と話したくなったとき、だれでも遠慮なくお客として来られるからです。仲間が集える場所になると思ったからです」と語る。

「このレストランがオープンしてちょうど1年になります。今はまだ赤字が続いて苦しいのですが、皆で力を合わせてがんばっています。赤字解消のためにお弁当宅配を始めたところです」

きれいな塗りのお弁当箱に入った昼食弁当は600円、区役所や児童館近くの会社からの注文が入ってくる。専従スタッフ3名と20名のボランティアで運営されているお店は朝7時半開店、ラストオーダーは8時半。朝食セットは大人気だという。沖縄の支援者から送られてくる古代米や豆が入っているちまきが特に評判で「おみやげとしてテイクアウトされる方もいらっしゃいますよ」と笑う。

ここでアルバイトとして就労の経験をつみ、地域の会社に正式に就職された方が既に何人かあるという。

女性自身が変わることによって社会を変えていこう

「“仕え従うこと”を女性の美德とする日本の古くからの考えは今も私たちの内に根強く残っていて女性の行動を縛っています。私たち女性自らが自分の権利に目覚めて声をあげていかななくてはと思います」

「暴力被害の女性たちはその過酷な体験から日本社会の女性に対する古い体質を知りぬいています。彼女たちこそが声をあげて古い社会概念を壊していく力と可能性を持っていると思っています。彼女たちが自分の中に強い力があることを確認し行動していけるように、私たち支援者も一緒に学習して力をつけていきたいと思っています。女性が自分らしく生き生きと生きられる社会は、男性にとっても住みやすい社会だと思うからです」

Mさんのグループは女性が学び成長していくためのさまざまな勉強会を企画し、女性自身が変わることによって社会を変えていこうと呼びかけている。

難病の娘と私の自立

—『コンビニハウス』の誕生—

障害をもった子どものいる家庭、特に母親は、いっさいの社会的活動から身を引き、育児に専念するのが当然であると当事者も社会も長い間思ってきました。また、その一家庭だけの力で障害をもった子どもの全存在を支えるには、そこまでしてもなお、多くの困難があることも事実です。社会もそのような家庭の孤軍奮闘ぶりを美徳として称えることで、自分たちの責任を回避してきたといってもいいかもしれません。

支える母親が若くて体力もあり、短期間であったらそれも可能でしょう。しかし、その状態が何十年も続き、母親自身の健康にも問題がおこり、家庭だけの手に負えなくなるのは時間の問題です。その時のために社会は施設をつくり、その子どもたちの受け皿としてきたのですが、その施設も家族が生活してきた地域から遠く離れていたり、いろいろな面で安心して大事な子どもを託すことのできる場所ではないようです。

レスパイト・サービス

障害をもった子どもを支える母親が身体の調子が悪いから病院へ行きたい、自分と子どもを親身になって支えてくれた老親の看病に帰りたい、甥や姪の結婚式に参列したい、何十年ぶりでクラス会に出席したい、たまには夫婦だけで食事をしたい…こんなあたりまえの願いに応えるために行政が準備した施設でのショートステイは、利用する日数や目的に制限があって、いつでも気軽に利用できるものではありません。それにステイ先で障害をもった子どもが身体の面で安全に過ごせるのは当然のこととして、精神的にも楽しく過ごしている保証がな

ければ、母親も安心して過ごせないのです。

そのような必要に迫られてカナダ、アメリカで始まったのがレスパイト・サービス（一時的に介護介助を家族にかわって引き上げるサービス）です。中京地区でははじめてのレスパイト施設、「コンビニハウス」を7年前に立ちあげたOさんに話を伺いました。

「わたしの人生なんなのよ！」

Oさんのひとり娘、Uさんはヴェルドニッヒ ホフマン症という難病です。そのUさんが20才を過ぎた頃、障害のない人たちと同じようなひとり暮らしに憧れて家を出る決心をします。

「障害のある人の親は皆そうですけど、わたしも生涯あの子を抱えていくつもりだったから、なにいつてるの、歩くことはできない、寝がえりも誰かの手を借りなきゃできない、着がえもトイレもお風呂も全部わたしがしてたから、それだけの介助を他人の誰がしてくれるか。ひっくり返ったら自分では起きることもできない、そういう子がひとり暮らししていくことは想像もできなかった」とOさん。

大反対をする母親を前にしてもUさんの決意は変らなかつたようです。

「もし今夜の介助者がいくら捜しても見つからないで、翌朝9時に次の介助者がくるまで、車椅子に座ったまま、ベッドに寝かせてもらえなくても、それでも自分で暮している、生きているんだという誇りや実感を味わいたかった」

後にUさんはその時のことをこう書いています。

「実はOさんはその3年ほど前、極端なマイナス思考で、わが子の障害を受けとめられず、Uさんの前で平気でそれを口にする夫と離婚しています。いつもUさんのことで争いの絶えない家庭に我慢できなくなったUさんが、離婚をして自分と一緒に家をでるか、それができないなら施設に入れてくれとOさんに迫った結果、出した結論でした。施設の現状をよく知っているOさんはUさんを施設に入れることはで

きなかったのです」

「ひとりで自立してあんな暮らしをするなら、わたしは別れなくてもよかった。離婚してやっとふたりできちんとした暮らしができると思ったら、今度は娘が出ていくっていう。こっちがまだ自立していなかったから、あなたのために離婚したのに、わたしの人生なんなのよ、あの子の介護がとり去られたらわたしはどうやって生きていったらいいのって、しばらく落ちこんでいました」

「コンビニハウス」誕生

そんなOさんの心に浮かんだのが以前Uさんも通っていた通所施設でした。Oさんは今度はボランティアとしてその施設と関わり始めます。

「いくら障害児のための学校や作業所があっても、一度母親が寝こむと全てとまってしまう、母親が全部抱えこんでいるから。母親が具合が悪く作業所に来られない子どもを迎えに行ってみると、母親は洋服を着たままソファに横になっているだけ、熱が40度以上もあったから、お医者さん行ったのってきいたら、この子がいるから行けない。それじゃわたしがこの子作業所につれてってあげるから、お医者さんに行けば。そういうことが繰り返されたんです」

そこで通所作業所に関わっている親と職員、大学の先生、学生ボランティア全部で12、3人が集って、「重度障害者の24時間を考える会」を始めました。そこにはひとり暮らしをしていたUさんも「ずっと気にかかっていたことが、ようやく何かの形になっていくかと思うと、じっとしてられなくなって参加しました。その会は1年8ヶ月続き、現在の「コンビニハウス」の理念がそこで生まれたのです。

1. 24時間サービス
2. 電話一本で受け付け
3. 本人の日常生活を大切にします
4. 利用の理由は問いません

5. 楽しい場所にします

6. 開かれた運営

以上のような理念に基づき、「コンビニハウス」では次の事業を行っています。

1. 宿泊ケア＝学校、通所施設、職場が終わった時点から翌朝までのケア
2. 昼間のケア＝土曜の午後、休日などのケア。余暇活動の援助
3. 送迎＝自宅⇔学校・通所施設・職場⇔「コンビニハウス」間の送迎
4. 相談＝家庭での介助・介護などに関する相談
「コンビニハウス」で対応できないことに関して、各種社会資源の活用などを紹介

“暮し続けたい、住み慣れたこの街で”

『『コンビニハウス』を始めてみて、それまで一番大変だと思っていた通所施設に通ってくる人たちが一番幸せな人たちだとわかった。地域にはもっと悲惨な状態の人が山ほどいた。発作的に子どもの首をしめたら口の端から血が流れてきて、それを見てハッと我にかえったというようなことが日常的にあるんです』

「悲惨なことを知っていてなにもやらずにみているよりは、中にとびこんでやった方が絶対私はラク。神さまが必ず支えてくださるから。神さまは泣くものと共に泣きなさいとっておられる。その教えに従って7年間やってきたからつぶれなかった。必要でないものは与えられないから」というOさんですが、7年間は言葉でいう程簡単なものではありませんでした。

“暮し続けたい、住み慣れたこの街で”をモットーに、発足当時はボランティアのみで、行政の補助金は受けず利用者の利用料だけでスタートしましたが、ボランティアだけでは対応しきれないと1年後職員2名を採用します。それに伴う利用料の大幅値上げの結果、登録者

数には大きな変化はなかったのですが、利用者が激減し、運営が困難になります。その打開策として3年目に昼間は使用していないレスパイト・サービスの施設を利用して、重症心身障害者通所援護事業を開始し、その補助金でレスパイト・サービス部門をまかなうという形で現在に至っています。2002年4月現在の「コンビニハウス」利用料金は、年間登録料30,000円、月会費10,000円、1時間利用料金400円、送迎料金500～1,000円、食費朝300円、夕500円、入浴料金1回200円などです。

「コンビニハウス」のこれから

「母親を支えることが同時に子どもの幸せを作る。これは社会問題となっている『児童虐待』と重なるものがあります。経済的に豊かになって生活が便利になり、支えてくれる隣人がいなくても困らない時代は、人間を孤立させる『危なさ』をもっているように思えます。『支え合う仕組みを意識的に作る』、21世紀はそんな時代なのかも知れません」

○さんの言葉です。

【注】 ヴェルドニツヒ ホフマン症＝乳児脊髄性筋萎縮症 筋萎縮を伴う進行性の弛緩性麻痺で全身の筋肉を侵す。

わが子を愛したいのに、愛せない母

連日、マスコミは虐待による子どもたちの悲惨な事件を報道している。「子どもたちがかわいそう」という連呼のなかで、虐待する母親の中には「私は、子どもを愛していないのではないか」、「子どもを叩いてしまう自分が憎い」という恐怖に怯え、誰にもいえない苦しみをもっている母親たちがいる。

私は、児童虐待に苦しむ親が集まる自助グループがあるときいて、台風接近の伝えられるなか、都心にあるマンションを訪ねた。この集まりは週1回、毎回4、5人の母親が集まり、カウンセラーを入れての話合いを行っている。この日は3人の母親が来ていた。

カウンセラーのFさんが「私も子どもを愛せなかった親のひとりです」と話し始めた。

「だからこそ、このグループの大切さがわかるのです。親たちのなかにはわが子を愛していながらも、自分では子どもを愛せないと思いつ込み、自分を責めてしまう親がいます。自分がイメージする良い親子になれないことに悩み、子どもといるだけで疲れしてしまう母親もいます。叩きたくない、叩かないようになりたいと思いつつ、叩いている自分を憎み、自分を追い込んでいる子どもに憎しみを感ずてしまう母親がいます。

ここに集まっている母親たちは、自分の考えや行動に自信がなく、自分を責めています。そこに彼らの誠実さがあるともいえます。惨めな自分から助かりたいと努力している人たちなのです」

「私も自分の子どもが赤ちゃんの頃、保育園の先生に、『今、こんなに辛い、苦しい』と救いを求めたのですが、『今だけのことよ。みんなそうだから心配ないの』と聞き流されてしまいました。家族さえ苦悩する親に向き合おうとせず、自分たちが、ささやかながらも必死

で出しているSOSに、『子どもは今が大切な時だから、しっかり抱きしめてあげなければ、子どもがかわいそう。子どもには将来があるのよ』とプレッシャーをかけます」

「疲れ、苦しんでいる親は、助けてほしいというより、相談する相手としっかりと向き合っただけ人間として受け止め、話を聞いてほしいだけなのです。それすら許されない状況の中で、子育てができない自分に自信をなくしていきます。だれも振り向いてくれません。最後は、悪い親、最悪な親を演じることによってしか、誰も自分を相手にしてくれないのです。

寂しいですね。子どもが成長していくように、母親も成長していくのですが…。世の中は、出産時から子どもに犠牲的に関わる最良の母親像を求め、親自身もその要求にこたえなければと必死になっています。どうして、みな、ゆったりと子どもを見守れないのでしょうか」

体罰は自傷行為の延長

一方で、社会には「しつけ」にこだわって体罰や心理的圧力をかけつづける支配的な親がいる。彼らは自分が子どもを傷つけていることに気付いておらず、「自分たちは子どもをこんなに愛している」と信じ込んでいるように見える。

Fさんはいう。「彼らも時には胸を痛めたり、反省しながらも、どうしていいかわからない環境の中にいるのです。ちゃんと聞いてくれる相手がいれば、反省できるのではないのでしょうか。体罰は自傷行為の延長です。彼らのSOSの叫びも受け止めるべきです」

互いに話を聴くことは、自分自身に出会うこと

子どもにとって良くないとわかっていながらも虐待をしてしまう原因は、いったいどこにあるのだろうか。Fさんはこう説明する。

「母親という社会的イメージの強要や周囲の社会環境、自分自身が虐待を受けてきたといった自己の育ちもあるでしょう。誰にもいえない

いことがあり、自分ひとりで苦しみつづけていることってありますよね。

たとえば、ほしかった愛情を受けたことがない。望まない妊娠。中絶や流産。性的被害。『母親はこうあるべきという姿』と『自分の本当の姿』とのねじれ。苦しみは、ますます自分を追い詰めていきます。子どもを叩きながら、こんなことをしてはいけない、自分は狂っていくのではないかと思うことさえあるのです」

「このグループでは何を話してもよいのです。『いいっぱなし、聞きっぱなし』といって、人の話を黙って聴くこと、話す時は自分の話だけをして、たくさんの悲しみや怒りを話し、時には泣くことで、苦しい気持ちを洗い流そうとします。同じ体験をした仲間の中ではじめて、自分があるのままでいてもよい場所を見出すのです。皆で車座に座り、互いの話をじっと聴くことは、自分自身に出会うことになると同時に、人と人との間に大いなる力、神さまといってよい存在を感じるがあります」

喜んでもらえると思った妊娠

グループのKさんは「妊娠を喜んでもらえると思っていたのに、夫は『僕は仕事が忙しいから子どもはみない』と即座にいい、私の母は、『やめてよ、私だって仕事があるのだから…』と喜んでくれなかったのです。出産した後も、少しでも弱音を吐くと、『子育ては血を吐いてでも頑張るものなの』といわれ、親にさえも子育てを理解されない。そのうち、自分が小さい時に虐待を受けたことを思い出して、誰にも話せず、夜も眠れなくなった。いつのまにか親と同じように、子どもを叩いている自分が、怖くて、怖くて…」と話し、「母親は、ちょっと休ませてともいえないものなのかしら…」

苦しみを共に担う者として

虐待をしてしまうと思い詰めている母親たちにとって救いはあるの

だろうか。「同じ悩み、苦しみをもったもの同士が、安心して話を聞いてもらうことができる、守られた空間、時間、仲間の中で自分を見つめることは、自分を知っていくばかりでなく、他人の苦しみを担う者として、アドボケーター（代弁者）となりうるのではないかと思います。アドボケーターのすばらしさは、助けるのではなく、共に歩くことで、自らの存在価値に気付かせることだ。苦しみや悩みだけでなく、私たちが人生で出会うすべての体験に無駄なものではなく、意味があるのだ。

苦しみも自分の宝となり、偉大なものからの使命に生きることができれば、こんなにすばらしいことはない。自分に価値を見出し、居場所がないと思っていた自分が本当にありのままでもいい場所を認めた時こそが“回復の時”といえるのだ。

現在、配偶者暴力の体験者を支える団体でも、権利行使のサポートをする人の活動が始まり、配偶者暴力被害の深刻さを理解している体験者が付添い人となって相談員と共に役所や裁判の場へのサポートを行っている。被害者を支えるだけでなく、暴力被害を体験した者も、心の被害から回復するきっかけとなることが多いという。

「ここに集まれる人は、まだよいのですが、社会の中で孤立している親たちはもっと多いはずです。そうした人たちの側に立って、代弁したい。そうした人たちと共に生きたいと思います。相手の苦しみや悩みに気付くだけでなく、尊敬をもって、相手の素晴らしさに気付くことが相手を受け入れるということではないでしょうか。

悩むことは誠実の表れです。悩みつづけるというのは、その人なりの強さなのです」とFさんはいう。

私たちは現代社会のカナリヤ

メンバーのMさんは、「私たちは現代社会のカナリヤです。一人ひとりが鳥かごという密室で孤独に泣いているのです。私たちが泣くことで、今の社会がどれほどゆがんでいるかが皆に伝わるとよいのです

が…」と話された。

最後に、「今、周囲にいる私たちは何が必要なのでしょうか」との私の問いかけに「相手の苦しみや悩みに対する感受性、想像力ではないのでしょうか」との答えがもどってきた。

あとがき

本誌は“叫び”をあげている人とともに生活している人たちを取材したものです。取材の申し出を快く引き受けてくださり、公表することにもご理解をいただきました。

ここにご協力を厚く感謝申し上げます。

2001年への日本カトリック司教団メッセージ『いのちへのまなざし』の「あいさつ」では現代の日本を、「しかし、わたしたちの生きていく日本社会は、…何ともいえない不安と悲しみに覆われています」と表現しています。

『ひびき』では、このような社会にあって、困難な人生を歩む人たちと共にいる人の生き方を紹介しようと努めました。

1997年から2002年までの『叫び』シリーズについて編集部宛に多くのご意見、ご批判が寄せられましたが、この『ひびき』につきましても前シリーズ同様、皆さまのご意見、ご批判をお寄せいただければ幸いです。

編集部

2003年3月5日 灰の水曜日

2003年度四旬節キャンペーン資料の問い合わせ先一覧

2003年度四旬節キャンペーン資料として例年のように、『四旬節メッセージ』、四旬節課題小冊子『ひびき』、ポスター、献金箱、献金袋、を用意いたしました。各小教区には「灰の水曜日」の前後に届くよう手配しておりますが、追加要求等につきましては各々所属の下記宛にお問い合わせください。

尚、『四旬節メッセージ』『ひびき』には点訳本、録音テープが用意されております。

- | | | |
|-----------|------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------|
| 札幌教区事務所 | 〒060-0031
札幌市中央区北一条東6丁目10
札幌教区本部事務局 | Tel 011-241-2785
Fax 011-221-3668
e-mail: dio-office@csd.or.jp |
| 仙台教区事務所 | 〒980-0014
仙台市青葉区本町1-2-12
仙台教区本部事務局 | Tel 022-222-7371
Fax 022-222-7378
e-mail: kyoku-office@sendai-catholic.jp |
| 新潟教区事務所 | 〒951-8106
新潟市東大畑通一番町656
新潟教区本部事務局 | Tel 025-222-7457
Fax 025-222-7467 |
| 浦和教区事務所 | 〒336-0001
さいたま市常盤6-4-12
カトリック浦和教会内カリタス浦和 | Tel 048-831-0134
Fax 048-824-1524
e-mail: couzou@ra2.so-net.ne.jp |
| 東京教区事務所 | 〒112-0014
東京都文京区関口3-16-15
東京教区本部事務局 | Tel 03-3943-2301
Fax 03-3944-8511 |
| 横浜教区福祉委員会 | 〒211-0064
川崎市中原区今井南町500
中原教会 | Tel 044-722-6060
Fax 044-733-9311
e-mail: fukushi@japan.interq.or.jp |
| 名古屋教区事務所 | 〒466-0037
名古屋市昭和区恵方町2-15
名古屋教区社会福祉委員会 | Tel 052-852-1426
Fax 052-852-1422 |

- 京都教区事務所 〒604-8006
 京都市中京区河原町通三条上ル Tel 075-211-3025
 京都教区本部事務局 Fax 075-211-3041
 e-mail: cathonbu@mbox.kyoto-inet.or.jp
- 大阪教区事務所 〒540-0004
 大阪市中央区玉造2-24-22 Tel 06-6941-9700
 大阪教区本部事務局 Fax 06-6946-1345
 e-mail: auxbpsec@osaka.catholic.jp
- 広島教区事務所 〒730-0016
 広島市中区鞆町4-42 広島カトリック会館
 広島教区本部事務局 Tel 082-221-6017
 Fax 082-221-6019
- 高松教区事務所 〒760-0074
 高松市桜町1-8-9 Tel 087-831-6659
 高松教区本部事務局 Fax 087-833-1484
- 福岡教区事務所 〒810-0028
 福岡市中央区浄水通39 Tel 092-522-5139
 福岡教区本部事務局 Fax 092-523-2152
- 長崎教区深堀教会 〒851-0301
 長崎市深堀町5-292 Tel 095-871-3459
 Fax 095-871-3464
 e-mail: mituyo@ngs2.cncm.ne.jp
- 大分教区明野教会 〒870-0166
 大分市明野北町1830-2 Tel 097-558-5670
 Fax 097-558-8851
 e-mail: santiagoflor2000@yahoo.co.jp
- 鹿児島教区事務所 〒892-0841
 鹿児島市照国町13-42 Tel 099-226-5100
 鹿児島教区本部事務局 Fax 099-225-0440
- 那覇教区事務所 〒902-0067
 那覇市安里3-7-2 Tel 098-863-2020
 那覇教区本部事務局 Fax 098-863-8474

お 願 い

本誌の編集にあたりましては下記の点に留意いたしておりますが、なにかお気づきの点がありましたら、ご指摘、ご教示いただければ幸いです。

- (1) 回答者のプライバシーにさしさわる、関係者、場所、関係事項に関する名称、氏名、住所、固有名詞等については一篇を除いて仮名とさせていただきます。
- (2) 差別語、不快用語につきましては、厳正な検討を加えて注意をはらいましたが、回答者自身の用語、用法はそのまま使用している場合もあります。

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない視覚障害者、その他の人のために録音または拡大による複製を許諾します。ただし、営利を目的とするものは除きます。なお点字による複製は著作権法第37条1項により、いっさい自由です。

四旬節キャンペーン課題解説 No.17 2003年

『ひびき』

2003年3月5日発行

編集人 宮原良治

発行人 池長 潤

発行所 日本カトリック司教協議会

社会福祉委員会・カリタスジャパン

☎135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10

TEL 03-5632-4439 FAX 03-5632-4464

ホームページ <http://www.caritas.jp> e-mail: cari-tas@fa2.so-net.ne.jp

【非 売 品】

本誌をより多くの方々にお読みいただくための発送経費に献金をお願い申し上げます。

「郵便振替番号 00170-5-95979 カリタスジャパン」

振替の際は意向として『ひびき』とご明記ください。



カトリック教会

カリタス ジャパン

CARITAS JAPAN

〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館 TEL 03-5632-4439 FAX 03-5632-4464